

近世泉州泉州郡平野部における水利と生産

—池上村の稲・綿輪作を素材として—

齊藤 紘子

はじめに

近世の和泉地域は木綿の生産地帯として知られている。泉州平野部の木綿生産を取り上げた先行研究には、中村哲氏と福島雅藏氏の論考がある。中村氏は、南郡春木村陸方（下左）の庄屋原家の経営に即して、手作り地・小作地それぞれの施肥量・作付け品種・貢租と宛米高の関係を分析した。その結果、原家は文政末以降小作地を増加させるが、明治一〇年代まではある程度の手作り地を保有し、明治二〇年以降寄生地主化する動向を明らかにしている^①。また、当該地域の綿作の特徴として、①河内の半田作や旧大和川流域の畑方作と異なり、乾田での稲・綿の輪作を中心とすること、②春木村の綿作は、貞享（元禄期に急増した後、宝暦期にピークを迎え、漸減・漸増を繰り返しながら明治初頭まで持続したこと、③しかし多くの村々では幕末開港後に生産量が急減した点を挙げている。輪作生産特有の要因（施肥量や乾・湿田所持の違いなど）を考慮するとともに、個別地主に則した分析という点

で参照すべき論点も多い。ただし村落構造との関係については、輪作を共同体規制ではなく個別経営内の選択として捉えたため、所持地の多い上層農民が毎年一定規模の綿作・稲作を維持したのに対し、所持地四反以下層は「自己の経営に基づいて稲作と田方綿作を合理的に配分した経営を行え」なかったと推測している。

一方、福島雅藏氏は泉州長井村（下条郷に所在）を対象に、田方綿作の衰退過程について検討した。その要点は、①長井村では安政期以降田方綿作が減少し、明治二年にはほぼ皆無となるのに対し、畑方綿作は安定的に持続する、②輪作は字単位に行われ、何らかの共同体規制下に展開した、③地主的土地所有の成長は安政期以降の田方綿作衰退期に進展するが、この過程で地主層による水利の掌握や分水規定の再確認が行われる、との見解である^②。輪作を共同体規制として位置付けたことは重要だが、安政期までの用水差配や権利状況を踏まえずに、田方綿作衰退期に地主の水利掌握が進むというのは、やや性急な評価であろう。

両氏の研究には重要な論点も多いが、方法的には同様の限界も見う

けられる。両氏とも、地主の土地集積過程から《明治維新前後における地主制の進展》という結論を導き、それを前提として近世後期の経営や水利運営について論じている。そのため、近世初頭以来の水利利用や村落秩序との関係は捨象され、村落社会における生産の具体相は十分に提示されていない。泉州平野地域の輪作生産については、まだ検討すべき点が残されているのである。

その点で注目すべき近年の成果は、和泉市教育委員会・大阪市大日本史研究室による合同調査を契機に進められた、中・近世移行期の村落史研究である。三田智子氏は、当該地域の文禄三年太閤検地に注目し、一七世紀初頭の村請制村と中世までの「郷」との関係について次のように整理した。^③すなわち、文禄検地は条里の「里」を単位とする「郷」（「和名抄」の郷名とほぼ一致する）ことに実施された。しかし、検地を受けた村々の村域は、各郷の郷境を越えて展開し、黒鳥村のように、集落が郷境上に位置する村もあった。本稿で取り上げる池上村の場合、集落は上条郷にあり、村域は上条郷・信太郷・上泉郷の一部にも及んでいた。しかし文禄三年検地の際、「泉州泉郡上條郷之内池上村御検地帳」に把握されたのは上条郷の土地（本郷）のみで、信太郷と上泉郷の池上村耕地は、信太郷や上泉郷村々の検地帳に登録された。その結果信太郷や上泉郷の池上村領は、上条郷からの出作地として扱われることになった。三田氏は、各郷の空間を復元すると同時に、一七世紀前半の年貢収納や土地把握が郷切で行われたことを明らかにしている。

つまり一七世紀の当該地域には、①村請制を規定する郷と、②集落

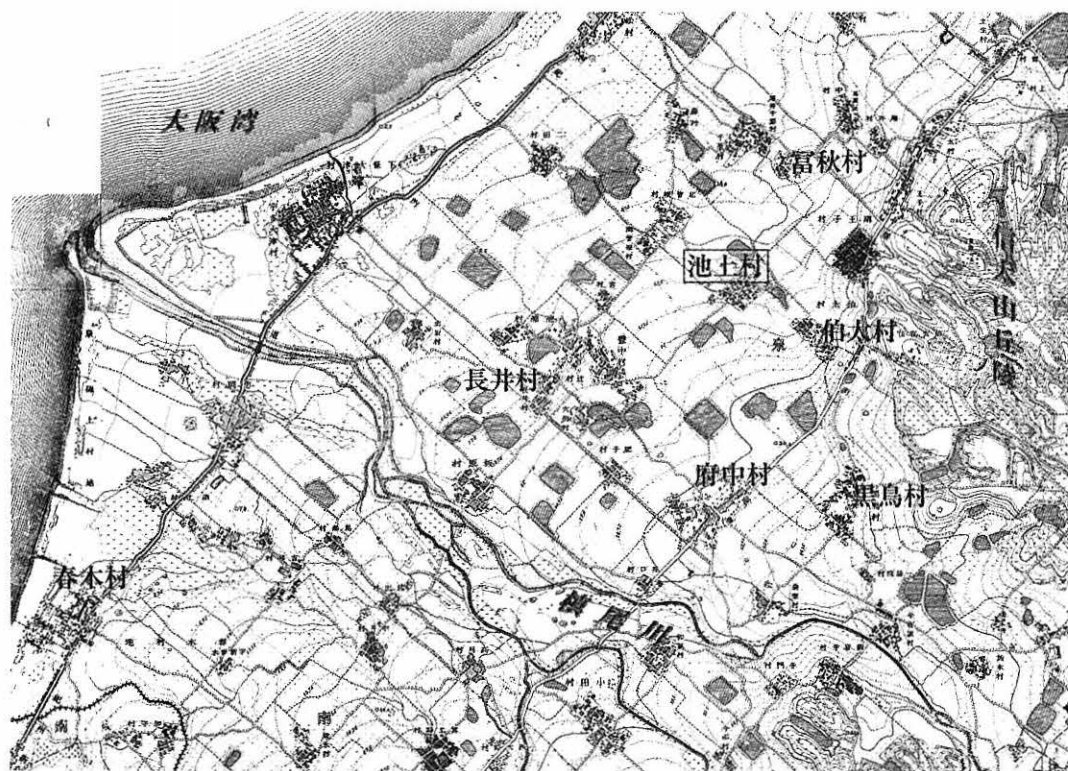


図1 明治18年頃の池上村周辺

を核とする各村落の生活領域という、二つの枠組みが併存したのである。郷の単位となった条里耕地は、村々にとって主要な生産基盤でもあった。「和名抄」の郷に由来する郷域の確定は、条里耕地における用水や生産の成立過程を考える上で重要な手がかりであろう。本稿では池上村を対象に、主に水利の局面から生産基盤の成立を段階的に把握し、それを踏まえて近世の稲と綿の生産実態を明らかにしたい。

近世泉郡の耕地利用については、信太山丘陵周辺の村々を対象とする町田哲氏の研究がある^④。町田氏によれば、横尾川右岸の信太山丘陵上には池水（天水）掛りで畑がちな耕地「上代」が広がり、近世を通して山畑の開発が進められた。また低位段丘は「下代」と呼ばれ、横尾川用水の灌漑する田地が広がっていた。池上村も「下代」と同じ低位段丘に位置する（図1）。村内に山はなく、地勢は南東から北西へ緩やかに傾斜する。近世の総村高は六百石余で、うち三三〇石余が大和小泉藩片桐氏領分（本郷）、三二〇石余が伯太藩渡辺氏領分（出作。当初は幕領）の支配下にあった（小字図参照）。家数は近世中期に六二軒、幕末慶応期に五六軒と推移する。

二〇〇五年夏、池上町で行われた和泉市教育委員会と市大日本史研究室の合同調査では、文書調査・ききとり・フィールドワークの成果として、池上村の「出作」「本郷」の空間構造が明らかになった^⑥。ただし村落構造の解明は、調査後の課題として残された。本稿では〇五年の調査成果を踏まえて、池上村の村落構造を水利や生産の局面から考察したい。分析対象とするのは二つの史料群である。一つは本郷庄

屋の南甚左衛門家に伝わる南清彦氏所蔵史料、もう一つは出作年寄の南甚右衛門家に伝来した南和夫氏所蔵史料である。両者とも合同調査の際に整理した史料だが、南清彦氏所蔵史料は和泉市教育委員会による第二次調査において、新たに九箱三袋分の史料が確認されている。

一、近世池上村における溜池の灌漑域と条里

本節では、近世池上村の水利において、最も重要な位置をしめた溜池灌漑のあり方に注目する。

（1）池上村の溜池

池上村には、菱池・今池・油池・千草池という四つの溜池があった。池の築造時期を記した史料はなく、いずれも中・近世移行期には既に存在したと考えられる^⑦。菱池・今池は隣接し、両者はほぼ一体の用水体系を構成した。まず明和四（一七六七）年に本郷の領主片桐氏に提出された「明細帳」^⑧から、溜池の概要を掴んでおこう。明細帳には、片桐領に關係する溜池の面積や水利設備が記載されている。今池・菱池については、池床坪数と樋・閘板の寸法が列挙されている。一方、油池の水除樋や伏樋には「御他領立合」との注記があり、水掛り田地七町二反の内、五町六反半は「池上出作田地水掛り、但シ渡辺越中守様御知行所」、一町五反半は「御地頭（片桐氏）様御田地水掛り」との内訳が記されている。両者を比較すると、菱池・今池は片桐領のみを灌漑する池で、池床も本郷に所在し、池の御普請所入用の配分基準となる水



掛り面積が略されたとみられる。他方、油池の水掛り地は五町六反半渡辺領と一町五反半片桐領の立会であるため、池床は片桐領の支配外であったが、領主普請の負担配分を明示する必要から、水掛り面積比を記載したのであろう。なお、明細帳に全く記載がない千草池は、池床・水掛り田地とも片桐領の外部にある溜池だったのである。以上を前提として、次に各池の灌漑域をみてみよう。

今池・菱池 まず、享保八（一七二三）年の「今池・菱池水掛反役帳」⁹⁾

から、今池・菱池の水掛り田地をみておこう。この史料は、本郷の水利用を「本郷水役支配帳」に算用し、その総額を村内各戸へ割賦する際の基準となる各人の水掛り田地の小字名と反数を書き上げたものである。帳面に記載された筆数は二〇六筆、総面積一九町七反九畝である。小字別の内訳を見ると、畑地の大学頭・ヒツカケや一部の田地（後述）を除いて、灌漑範囲は本郷のほぼ全体に及んでいる。

油池・千草池 油池・千草池の水掛り田地がわかる史料は、宝永元（一七〇四）年に作成された「泉州泉州池上出作新検地並帳・油池千草池川筋樋寸法覚之帳」である。この史料の前半は出作二〇八石分の地並帳で、後半には出作二〇八石分に関わる油池・千草池の池床・川筋・樋の寸法が列挙されている。ここでは、後半の「油池千草池川筋樋寸法覚之帳」（以下「川筋樋寸法帳」と略）部分に注目したい。

油池は「備中様御知行所」にあり、灌漑面積の内訳は、①「本郷へ入」分が一町三反半、②「尾井（尾井村）へ入」が二反半、③「出作へ入」分が五町九反と記されている。①と③の合計七町二反半は、明

細帳の油池水掛り反数七町二反とほぼ一致する。①の「本郷へ入」分について、元禄六年段階の水掛り田地を内堀半反・新二郎田一反・川そへ一反・通シ田一反・道端一反・尻恵四反・二反田・徳作り三反大・除おち一反・字名不明大と書き上げた史料があり、全体を合計すると総面積は一町五反大である¹⁰⁾。小字図を参照すると、本郷における油池掛り耕地は、集落北側の油池と千草池の間にあったことがわかる。

次に千草池の記載を見ると、「片桐主膳正様知行所池上村境内二有」と記され、灌漑面積の内訳は、①五町一反大が「池上出作」、②一町七反半が「留秋（＝富秋村）」、③一町三反大が「千原出作」に分かれる¹¹⁾。

千原出作は「尾井千原」とも呼ばれ、上条郷千原村から信太郷（尾井村）への「出作」である。もともとは尾井村領として検地を受けた無人別の村落で、池上村の出作と同様の経緯で成立した¹²⁾。富秋村は池上村の北隣にあり、信太明神を核とする信太郷七ヶ村に含まれる。つまり、千草池掛り①③の田地は、信太郷として検地をうけた空間にあった。

以上の検討から油池・千草池は、主に信太郷池上出作・千原出作・尾井村・富秋村の灌漑池として築造され、菱池・今池は上条郷池上村を中心とする一里分の用水として整備された溜池と考えられよう。

（3）伯太村との立会水利

では、この四池を利用しない上泉一一四石分は、どのように灌漑されたのだろうか。明治九年六月に池上村出作の「旧上泉方」（上泉郷分）が作成した「新畝 立会伯太池々掛り反別調帳」には、隣村伯太村

表1 明治9年 伯太池々水掛り田地

小字名	筆数	面積 (新反畝)		
池側	3	4反	7畝	23歩
花村	16	6反	2畝	29歩
土井	2	1反	2畝	23歩
大門	2	1反	6畝	27歩
大根(※1)	5	2反	2畝	13歩
向手	15	1町	6反	7畝
上泉	1	3反		24歩
宮下	1		1畝	22歩
門先	2	2反	2畝	20歩
大畝町	1	1反	7畝	3歩
雑候也	1		9畝	3歩
皮田	3	1反	9畝	24歩
九ノ坪	1	1反		19歩
十ノ坪	2	2反	1畝	4歩
十一	1	1反		17歩
十五	2	2反	2畝	10歩
坊上	1	2反	5畝	4歩
小路	7	4反	5畝	10歩
林(※2)	20	2町	4反	12歩
菱池口	1	2反	1畝	27歩
キサヘリ	3	4反	7畝	20歩
合計(※3)	90	8町	9反	6畝

典拠：南清彦氏所蔵史料・箱18-188「新設立会伯太池々掛り反別調帳」。

※1…字口大根・奥大根を含む。

※2…字林橋詰・林角田・林溝ヘリ・林池下・林中・林西角・奥林・口林を含む。

※3…史料では「惣計8町8反6畝17歩」と記載。

の池を立会利用する田地(小字・新畝面積・所有者)が列挙されている(表1)¹³⁾。この伯太池々掛りの田地は上泉郷側の出作にある小字をほぼ網羅している。また、近代の本郷・出作合村後、明治九年までの時期に伯太村との間で水利費を割賦した勘定帳によれば、池上村の負担分は「旧(上泉)石高一一石」を母数として各戸の所持高に高割されている¹⁴⁾。

この一一一石は、出作(上泉郷分)の村入用を記載した村方夫代帳の高割石高一一石と一致するので、諸役負担に用いる上泉全体の耕地石高と考えられる。つまり、前述の四池が灌漑しない上泉一一四石の土地はすべて隣村伯太との立会池掛りだったのである。

以上を整理すると、池上村における用水体系は、①菱池・今池が灌水する本郷(上条郷)、②伯太村の池々を立会利用する上泉郷の出作(一一四石分)、③油池・千草池の水掛りからなる信太郷の出作(二〇八石)に分かれていた。このうち、本郷は大半が①の菱池・今池用水体系だが、③の油池掛りも存在する。この油池掛り本郷田地は、図1に

よれば字徳作り・尻恵の一部・通し田・内堀という本郷北端の郷境付近にある。千草池西側の郷境は六ノ坪の北端ライン、千草池東側の郷境は徳作りの北端にあり、両者比較すると、東側の郷境は西側よりもやや北に張り出している。試みに千草池西側の郷境を東側に延ばすと、字尻恵の間から通し田の南端を抜け、油池の樋口に突き当たる。油池の樋口の場所からみて、このラインは油池掛り本郷田地の南限にあたる。つまり、油池掛りと今池・菱池掛りの境界は、信太郷・上条郷の境にある条里の「里」の界線に一致する。以上から、①③の用水は、上泉郷・信太郷・上条郷それぞれの用水池として築かれたと推定できよう。四つの溜池は、検地までの段階で条里に基づく「郷」の主要な生産基盤として開発されたものだったのである。

二、こうこうず井水論と井戸仲間の成立

前節での検討から、近世池上村の四つの溜池は一七世紀以前に条里単位の「郷」の水利として築造されたもので、その枠組みは近世の用水体系にもつながることが明らかとなった。しかし、中世末の集落に居住する百姓の所持耕地は、こうした郷の範囲を越えて展開していた。本節では集落と水利秩序の關係に注目しながら、溜池灌漑のうえに重層化する諸水利の利益をみてゆきたい。

(1) こうこうず井の流末八ヶ村

近世泉州郡平野部の多くの村々は、郡内を北上する槇尾川の水を取水

し、用水として利用していた。池上村の水利条件を考える前提として、まず横尾川流域村々との関係をみておきたい。

光明池ができる昭和初期まで、泉郡平野部の主な水源の一つは、和泉中央丘陵に築造された谷山池・上林池であった。¹⁶横尾川流域村々は川筋に井堰を設けて川水を引き、水が枯渇すると池水を川に落として引水した。横尾川には六つの井堰（一ノ井・太田井・久保津戸井・こうこず井・東風川井・桑畑井）があり、井堰を使う村々が「井郷」を形成した。¹⁷このうち池上村が関わるのはこうこず井掛りの村々（黒鳥村・府中村）である。そこで、こうこず井との関係について述べておこう。

享保三（一七一八）年、久保津戸井が川床に設けた新井路をめぐって、対岸の近接したところに井口をもつこうこず井が争論を起こした。

久保津戸井は、川水取水ではこうこず井より下流の井口を利用したが、池水取水のためにこうこず井上流まで川床に井路を掘り設け、そこから旧来の井口へ水を引こうとしたのである。¹⁸またこの争論と併

行して、谷山池の普請を計画した一之井・太田井・久保津戸井・東風川井の四ヶ郷八ヶ村に対して黒鳥村・府中村が反発し、桑畑井（府中村惣部出作掛り）を除く四井郷対こうこず井の対立も表面化する。該当村々は、異領主村落間の土地・山林・水路の争論を裁く京都町奉行所に出訴し、検使役人の見分をうけた。しかし取水の吟味が不十分で、享保六年五月には再び検使役人が派遣される。¹⁹ところがその裁許を待つ享保七年に、上方八ヶ国の土地関係訴訟について所管変更があり、和泉国は大坂町奉行所の管轄下に移された。これを受けて関係諸村は

大坂町奉行所へ再訴願し、争論は大坂での対決に移行する。そして、享保一二年の検使久下藤十郎による見分を経て、谷山池普請・久保津戸井新井路それぞれの裁許状が出された。享保期の水論の経過と論点は、熊谷光子氏が紹介しているので詳細には立ち入らないが、こうこず井の余水利用について、次の願書を見ておきたい。²¹

【史料1】

乍恐書付を以申願申上候

古郡文右衛門御代官所泉州泉郡 介松村

平岡彦兵衛御代官所 同 千原村

宝七郎左衛門殿 宮村

渡辺備中守殿御知行所 伯太村

池上出作

池上出作

片桐石見守殿御知行所 豊中村

池上村

一、右八ヶ村之儀ハ泉州府中村かうくす井筋之水下二而御座候、右之村々溜池ハかうくす井水を込来、勿論渴水之時分も横尾川筋へ水参候節ハ水取下シ田地やしない来申候、尤右八ヶ村之儀かうく津筋の外ニ水下り申井筋無御座候、然所二かうくす井之川下久保津戸井郷々今度川中ニ新井路ヲ築登り、新規成□法ニ付かうく津井筋へ水下り不申、右八ヶ村御料・私領之田地元来日

損所弥近年旱損仕迷惑千万ニ奉存候、依之去年八月十一日京都御奉行様へ右之段々書付を以御願申上候処^マニ、同月廿一日久保津戸井郷四ヶ村、并二府中村・黒取村・右八ヶ村共対決被仰付被下候上、何分御検使可被仰付候旨被仰下奉畏罷下り申候、右申上候通久保津戸井郷^ル我俣致候二付、水下別而日損仕迷惑千万奉存候、乍恐前々之通、横尾川筋井関巡々之作法ニ被仰付被下候様ニ奉願上候、以上

享保六丑年六月七日

八ヶ村庄屋・年寄名有

御検使御役人様

これは享保六年五月の検使見分時に提出された願書である。こうこう井より引水する八ヶ村は水上の府中・黒鳥両村に加勢し、「井筋水下」の村として独自の訴願を行った。この願書によれば、八ヶ村は井筋から田地へ直接取水するのではなく、各村の溜池に水を引くという方法で水を使い、渇水時は谷山・上林池水も利用していた⁽²⁴⁾。この用水とは、黒鳥村・府中村の余水のことであろう。池上村は本郷・出作とも差出村に加わっており、村全体がこうこう井の余水を利用したのである。なお、流末八ヶ村は谷山池郷の構成村ではなく、争論への関与も府中村・黒鳥村への加勢にとどまり、対立村々と直接対立することはなかった。こうした違いはこうこう井内の井郷運営においても存在し、井郷の用水を差配する権限は府中・黒鳥の二ヶ村に限定されていた⁽²⁵⁾。池上村など八ヶ村は、こうこう井の流末村として余水の

分配には預かるが、井郷内においてはその構成主体である黒鳥村・府中村と並んで諸権利を分有するようなことはなかったのである。

(2) 池上村轡出渚の争論

井郷の争論と並行するように、池上村内にも湧水をめぐる水論が惹起した。対立の構図と背景について、こうこう井争論との関係を考慮しながら見ておきたい。まず、享保五(一七二〇)年の争論から検討しておこう。

享保三年に庄屋に就任した南甚左衛門は、同五年の日記「子之覚」⁽²⁶⁾に村の南端に湧く「轡出渚」争論の経過を記録している。この轡出渚の利用形態は、五人組数個ずつを合わせた地縁的な組(上・東・西・かいと・小寺・西)ごとに水を掻き出すというものであった⁽²⁶⁾。「子之覚」によれば、同年七月二九日は、村中に先立ち「かいと」という組が渚を掻く順番だったが、かいと組は水を掻かず、村外の者へ分与した。翌日もかいと組は水掻きを行わず、八月一日に村中が掻く順番になり、一番目の組が渚水を利用した。続く二・三日はかいと組の番であったが、必要がなくなったのか途中で止めてしまう。そこで惣右衛門が村中を代表して取水を要望したところ、かいと組は水を渡さず、五日に字「廿四」の豊中村六左衛門田地へ水を下した。百姓らは他村の六左衛門へ水を渡したことに憤慨し、領主片桐氏へ次の訴状を提出した⁽²⁷⁾。

【史料2】

乍恐書付を「以脱力」御訴訟

享保五子年八月五日

池上村庄屋 甚左衛門

同村年寄 与兵衛

同 与次兵衛

印形京都へ持参候

同村組頭 太郎右衛門

〃 介左衛門

(他七名略)

三好浅之右衛門様 吉田源右衛門様

一、今年旱損二付、所々井戸堀候へ共水無之、井水貰申度申込候得共、今度井水出入二付水曾下シ不申、田地かき生候義難義仕候、池上村之義ハ漸字廿三轡手之測斗二而田地をかき生申候、a然共此測之義ハ、先年五郎左衛門・孫兵衛と申者之先祖道泉と申者所持仕候田地へ村中罷出、測をほり水出申二付、村中ぐもかき可申と申候へともか、セ不申候二付双論二及候処、持主道泉二而御座候二付、九十年以前寅之年、初日二日二夜道泉方二水をかき、次之日二日二夜村中水をかき、出水之義ハ池守を定、蟲肩無之田地へ水を入候様ニ被為仰付、則 古主膳様御掟書道泉拝受仕二、今ニ五郎左衛門・孫兵衛所持仕罷有候、夫二付、先年之義ハかいと九拾七石分庄屋仕罷在、勿論廿三之田地測共道泉所持仕候二付而、右之御掟書被成下候、b只今ハ村一所ニ罷成、田地之義も村支配ニ罷成候二付、測床畝へり壺斗三升村中弁罷有候、かいと分之田地水かき候所ハ少々二而御座候故、村中之者共田地旱損二及候田地へ水かき申度、右両人之者共へ頼申候へ共、二日二夜かき不申、測止置候而も一水も呉不申、あまつさへ御領分とハ申ながら、豊中村七郎右衛門暖同村六左衛門と申者之田地廿四と申へ水もらしか、セ申候、村之田地之旱損を構不申、村旱損致させ候様ニ奉存候、御掟書御座候二付是迄一言不申上候、村中御救と被思召上、御慈悲之上右両人之者共被召出、乍恐 御掟書被為召上、村中一同二順々水かき候様ニ被為仰付被下候ハ、難有可奉存候、以上

願書にはかいと組頭の介左衛門も含めて、池上村の庄屋・年寄・組頭が連印している。願書の冒頭には溜池を養う井水の状態が書かれている。旱魃のため村内に井戸を掘ったが水の出が悪かった。そこで他村へ井水の分与を頼んだが、「井水出入」の最中で取水できない。この「井水出入」とは、時期からみて史料1の井郷争論のことであろう。こうこうず井の争論によつて井水の供給が滞り、池水の不足を解消できないなかで池上村独自の水利である測の重要性が高まったのである。争論の原因は、測に対して強い権利を持つ五郎左衛門・孫兵衛の測利用である。村側はその測利用権について、過去と現在の違いを主張する(a・bの二段階)。

まずaによれば、「九十年以前寅之年」すなわち寛永三(一六二六)年に、「道泉」と村の間で争論が起こった。村側は、五郎左衛門と孫兵衛の祖先「道泉」が所持する田地に村中の人足が出て測を掘った経

緯を主張し測を使おうとしたが、道泉は認めなかったのである。対立は先代藩主が道泉に測の番水掟書を下付して決着した。村側は掟書が道泉へ発給された理由について、①寛永期には道泉が「かいと」九七石の庄屋であり、②測田地の所有者でもあったからだと認識している。

①によれば寛永期の池上村本郷には道泉が捌く「かいと九七石分」という枠組みがあったことになる。これに関連する史料が、i 宝永四年(一七〇七)年「池上村永代御触状諸事覚帳」⁽²⁸⁾に記された「庄屋代々、往古ハ大村ハ長兵衛、かいと九十六石ハ五郎左衛門迄別ニ捌、天和元年ハ輪番ニ成」という覚書と、ii 一七世紀池上村本郷の二冊の名寄帳⁽²⁹⁾である。i は後年に記されたものであるが、かいと九六石とは別に長兵衛管轄の大村が存在し、天和元年に合併した後輪番庄屋体制をとったという。一方、ii の名寄帳の総石高はいずれも二三〇石余しかなく、池上村本郷高三三〇石に比べると一〇〇石程度少ない⁽³⁰⁾。これは、三三〇石から先述のかいと分九六石を差し引いた大村の石高とほぼ等しい値である。また名寄帳の登録者を見ると、屋敷を所有する百姓五〇名の後に、「かいと」の肩書をもつ無屋敷の孫左衛門・助左衛門・孫兵衛が入作者として記載されている。つまりii の名寄帳は「かいと」九六石分を除いた名寄帳と判断できよう。つまり一七世紀の池上村では、屋敷地(人別)を基準に「かいと」と「大村」が別々に耕地把握を行い、それぞれから庄屋を輩出したのである。

ちなみに、寛永三年に下付された掟書の写しは一八世紀初頭の万覚帳にも散見する。

【史料3】

其方轡手之池割符之事

一、初日 二日二夜 道泉

一、次日 二日二夜 村中、付喜左衛門分共

一、出水之儀ハ水入を定、田地江蟲肩偏頗なく水を入相渡し可申候、水をかき申に成候てハ二日二夜ツ、替々にかき可申候、若此旨相背申分仕候ハ、曲事ニ可申付者也

寛永三年寅七月晦日

主膳正 書判 印

泉州池上村道泉

右ハ古主膳様御掟書之写也、五郎右衛門家つふれ申候故、清月方へ遣し在之候(後略)

これは宝永期の庄屋岸田武右衛門が「本郷万覚帳」⁽³¹⁾に留めた写しである。領主片桐氏が「池上村道泉」に渡したもので、割賦の内容も「初二日二夜道泉、次日二日二夜村中」と書かれており、先に見た願書の言及と一致する。また武右衛門の添書には、掟書は五郎右衛門家が代々所有したが、現在は逼塞し清月という人物の元にあると記されている。この清月は、宝永三年名寄帳にかいと組の一軒として記載され、二四石弱の耕地を保持する有力百姓である。つまり、轡出の掟書は、かいと村の系譜をもつ有力者の元に伝来したのである。

このように、村人よりも強い権利を持つかいとの測用益は、近世初頭以来のものであった。村側はその歴史的背景を認めつつ、かいとが

大村と一村になった現在、測は「村」の支配下にあると主張する（b部）^(分) 測底分の年貢も村中で弁えてきたのに、かいとが村人より他村の用益を優先させたことは認めがたいと述べ、寛永期の掟書を召し上げるよう求めたのである。

双方の言い分を聞いた代官は、村役人宛ての差紙において、掟書は追て詮議し、それまでの間、五郎左衛門と孫兵衛が水を掻かないときは村の者へ遣わすよう指示した。⁽³²⁾ 裁許結果は不明だが、この時期の嚮出測の用益には、かいとと村の百姓との間に強い緊張関係が存在した。

なお、両者の間で一貫して村側に立つかいと組頭介左衛門の立場も興味深い。介左衛門は五郎左衛門・孫兵衛らと同じ集落にいたが、元禄九年の測水番割では介左衛門は同組の庄太夫とともに村分の三番手（上組・東組）に含まれ、かいととの測用益から除外されていた。⁽³³⁾ つまり、村政だけでなく嚮出用益でも村と利害を共有する存在だったのである。

嚮出の争論は享保九年にも再燃する。今度は、五郎左衛門と孫兵衛が村方への不満を訴えた。享保九年の覚帳によると、六月二一日に村人が久左衛門の所持する「嚮手ノ上廿三ノ田地」に野井戸を掘りかけたところ、五郎左衛門は嚮出測の水量が減ると片桐氏へ出訴した。藩の「井堀儀勝手次第」という判断を受け、百姓らは再び鍬を入れ新井戸を築いた。その数日後、今度は孫兵衛が新井戸のために嚮出の湧水が減ったと不満を述べる。庄屋甚左衛門はかいと組頭介左衛門に対して、井戸と測の水量を確かめ、訴訟沙汰となれば組頭として証言するよう指示した。七月に井戸の湧きが弱くなったので井戸掘りを始めた

ところ、二一日、五郎左衛門・孫兵衛らは「嚮手ノ井ニ水多出、測水減」ことに再び不満を持ち、再び片桐氏へ出訴する。

訴状は「願書之写別ニ有」という記載のみで確認できないが、対立の原因は井戸の新設による測水の減少であった。同年の覚帳には「六月廿一日ヨリ廿二日、九ノ坪井戸堀かける」や「七月三日、十坪井戸堀直に取かかる」のように、村内の井戸新設や浚渫が記録されている。村方・かいと間で嚮出測の番水を行っても、かいとが初日の権利を保持する限り、村にとつての測水の有効性は低く、他の水源が必要となる。そのために始まった井戸普請が湧水の豊富な嚮出周辺にも及んだのであろう。こうした争論を経て、かつて独自の捌き高を持ったかいと村は、池上村本郷の村政へ包摂された地縁組織「かいと組」として、その性格を変えてゆくのである。

（3）井戸利用のあり方

では、享保期に建設された井戸はどのように用益されたのだろうか。延享四（一七四七）年、村内三つの井戸仲間が仲間掟を再作成し、「馬賀井・十野坪井・河内井三ヶ所連判帳」という帳簿に集成した。例として馬賀井戸仲間の掟を引用しておく。⁽³⁵⁾

【史料4】

池上村馬賀井戸仲間掟覚

一、抑此馬賀井戸与申ハ、享保九辰之年新に堀、田地かへ生来り申

候、其節左ノ人数委細かための連判いたし置候得共、分失に付、延享四卯年七月に如此改かへ、左之通印形いたし置申候事

一、番手ニ水くみ候節ハ、一日一夜反数四反宛、水くみ可申事

一、此井戸附之田地売買致候ハ、此連判中間江披露のため、酒式升宛振舞可申候、夫とも田地売主此井戸付間敷由申候ハ、是非

におよばず候事

一、此井戸諸普請之節、中間之者出不申候ハ、いつとても其通り、酒代として銀式匁可取之候、并ニ此井戸ニ付、中間共寄会之節、不出之もの有之ハ、銀匁匁宛可取之候事

一、此井戸之儀、左之通人数拾六人之外、耆人も中間江入申間敷候事

井戸中間連判覚

一、壹反

金蓮寺（印）

一、式反半

徳兵衛（印）

（一四筆省略）

反ノ式町六反

人数ノ拾六人

右之通永々相違無之候、此井戸地年貢として、毎年ニ米式升宛地主江可遣候、水吸候年ハ、中間与地主与相對ニ而可致候、仍而中間連判一札如件

延享四卯年七月十一日

金蓮寺（印）

徳兵衛（印）

（以下一三名略）

以上

この掟書によれば馬賀井戸仲間は享保九年の築造時において、既に利用権をもつ百姓が固定されていた。仲間による連判帳が作られたこともわかる。馬賀井戸の成立時期は次に掲げた十ノ坪井戸の築造とは同時期である。

【史料5】

一、先年享保八卯年七月八日、此頃旱魃に付、我々共得心之上、所持之田地十坪西角に井戸堀申候処、殊之外出水強、井戸床七尺四方之地、年貢として左之人数ノ毎年に米式升宛相渡申候、然上ハ永々中間井戸ニ候間、御田地相続可仕候事

十ノ坪井戸の成立は享保八年の旱魃によるものであることから、翌年に掘られた馬賀井戸も同様の事情があつたものと言えよう。享保八年は、前項でみたこうこうず井と久保津戸井の争論が大坂町奉行所の係争へ移行した時期でもある。両井戸の成立も、井水争論を背景とした用水確保策の一つと捉えることができる。

これらの井戸運用規定は、大枠において共通している。すなわち、①水は一日一夜田地数反分ずつ「番手」で汲み、②利用権は井戸水を使う田地「井戸付之田地」の所有を前提とする。なお、田地が質入などで売買される場合、購入した者は披露目料を振舞わなくてはならない。③構成員の義務は井戸普請と寄り合いへの参加で、不出者には出

銀を課す、という三点である。

ここから井戸仲間の特徴は、家単位で仲間に入り、井戸と灌漑田地をセットにすることによって、権利の及ぶ範囲を限定した点にあるといえよう。後述するが、複数の井戸仲間に加える百姓も確認できる。

前述の轡出測の場合は、「かい」と「村方」が日割りを行い、村方は「組」を単位に村全体で用益した。しかし、享保期に成立した井戸にはそうした方法は引き継がれず、仲間による用益が主体となる。轡出測は、一組の番手で四町強を灌漑することができたが、史料3の馬賀井戸掟で見る限り、各井戸は全体で二町半ほどの田地を灌漑する小規模かつ局所的な水源だったのである。

享保期以後、池上村では仲間井戸が次々と掘られる。明和八（二七七）年には字八ノ坪・三十五・九ノ坪の三ヶ所に井戸ができた。また、明治五年八月に小泉県から堺県への移管に伴って提出された「御普請所書上帳」³⁷には、河内井戸三ヶ所・大字頭井戸・八ノ坪井戸・十ノ坪井戸（二か所）・十四井戸・馬ヶ井戸（二か所）・宮前井戸の各井戸が確認できる。井戸は近世を通じて旱魃時の補完用水としての機能ももち続けたのである。

以上、近世中期以降増加する井戸仲間のあり方を、既存の水利用益との関係から考察してきた。四つの溜池は、いずれも横尾川筋こうこうず井の余水を引くことで維持されていた。井戸の「流末」に属し、こうこうず井郷と同一の利害をもったが、井郷内の配水権は谷山池郷を構成する府中村・黒鳥村が保有した。

一八世紀初頭以降、池上村では谷山池郷における井水争論の長期化を背景として、井水によらない用水確保が活発化した。ただし村の内部分では、既存の測用益や新しく築造された井戸をめぐる、百姓間の水論が多発する。水論の構図は、主に村方対かいと有力者の対立として展開した。池上村には独自の水利として一七世紀初頭より轡出測用益があつたが、この測では所持者道泉の家筋が強い権利を保持していた。道泉は天和期までかいと村の高を捌く庄屋筋であり、測支配についても村とは相対的に独自の用水差配を行っていた。しかし、そうした実態は、争論のなかで本郷全体の「村支配」という論理によって否定されていく。一方、村内には小規模で局地的な水利設備として複数の井戸が築造され、それぞれの利用者からなる井戸仲間が成立した。享保期以降の池上村の用水差配は、①四つの溜池用水、②測床所持者と村方が用益する轡出測、③各仲間構成員のみが使用できる仲間井戸、という三つの重層的な水利権が絡み合う秩序のもとで機能してゆくのである。

三、池上村における輪作の特質

ここまで、池上村の水利に即し、中世末までに「郷」単位の水利用として整備された溜池、かいと村が優先的な利用権を持つ轡出測の用益形態、一八世紀以降に成立する井戸灌漑のあり方を段階的に辿ってきた。本節ではこうした水利条件を踏まえて、近世中・後期における具体的な耕作のあり方を検討し、池上村における稲・綿作の特徴と水利

表2 池上村本郷の毛見帳一覧

網掛は偶数年(西暦)。

年号	西暦	月	史料表題	文書番号 (南清彦氏所蔵)	差出→宛先	稲高(石)		綿高(石)
						早田	晩田	
享保3	1718	10月	戌年池上村毛見帳	箱9-6	藩役人→村	76.561		
享保11	1726	10月	池上村毛見帳	箱10-85	村役人→	144.853		
享保17	1732	10月	子年池上村早田晩田株荒綿小毛見帳	箱10-73	藩役人→村	146.617		15.533【株荒】
享保18	1733	10月	池上村早田小毛見帳	箱11-163	藩役人→村	6.399		
享保19	1734	10月	寅年池上村小毛見帳	箱10-61-7	藩役人→村	9.413		
元文元	1736		辰年池上村小毛見帳	箱10-61-6	藩役人→村	173.634		
元文4	1739	10月	未年池上村晩田小毛見帳	箱1-9	藩役人→村	8.815	151.375	
寛保3	1743	9月	池上村畑綿小毛見帳	箱9-47	村→藩役人			113.053【畑】
延享元	1744	10月	子畑綿小毛見帳控	箱1-10	村→藩役人			12.515【畑】
延享2	1745	10月	丑畑綿小毛見帳	箱1-19	村→藩役人			16.976【畑】
寛延3	1750	10月	午年池上村晩田小毛見帳	箱10-32	藩役人→村		140.743	
寛延4	1751	10月	未年池上村晩田小毛見帳	箱1-15	藩役人→村		136.050	
宝暦2	1752	10月	申年池上村晩田小毛見帳	箱10-61-13	藩役人→村		159.150	
宝暦3	1753	10月	酉年池上村晩田小毛見帳	箱10-61-12	藩役人→村		139.223	
宝暦6	1756	9月	子年早田小毛見帳控	箱1-17	村役人→藩役人	30.540		
宝暦7	1757	10月	丑年池上村晩田小毛見帳	箱10-61-15	藩役人→村		120.876	
宝暦8	1758	10月	寅年池上村晩田小毛見帳	箱10-61-14	藩役人→村		123.620	
		8月	木綿高附帳	箱9-64				108.116
明和8	1771	10月	木綿小毛見帳	箱1-11	藩役人→村			119.741
天明2	1782	9月	寅木綿御毛見帳	箱10-86	村役人→			116.926
天明6	1786	10月	午稲作御検見帳	箱6-4	村役人→藩役人	180.259		
		10月	午綿作御検見帳	箱1-5	村役人→小泉役所			130.027
		10月	午綿作御検見帳	箱3-35	村役人→藩役人			130.027
寛政6	1794	10月	池上村稲作小毛見帳	箱1-7	藩役人→村	180.361		
寛政9	1797	9月	巳木綿作下見帳	箱3-32	村役人→藩役人			123.525
寛政11	1799	9月	未綿作御毛見帳	箱10-36	村役人→			136.857
寛政12	1800	9月	木綿毛見帳	箱1-12	村役人→小泉役所			136.311
享和元	1801	9月	木綿毛見帳	箱11-146				142.072
享和2	1802	9月	木綿下見帳	箱1-14	村役人→小泉役所			117.723
文化3	1806	10月	寅綿作小毛見帳	箱9-5	藩役人→村			133.292
		10月	池上村稲作小毛見帳	箱10-62	藩役人→村	177.9■1		
文化5	1808	9月	木綿毛見帳	箱9-4	村役人→小泉役所			142.794
文化6	1809	9月	木綿反畝高毛見帳控	箱1-3				144.012
嘉永3	1850	9月	木綿作下見帳	箱12-22	?			153.609
安政2	1855	9月	稲作下見帳	箱9-31	村役人→小泉役所	212.764		
		9月	木綿作下見帳	箱9-27	村役人→小泉役所			105.310
安政6	1859	10月	稲作下見帳	箱10-18	村→小泉役所	224.544		
元治元	1864	9月	稲作下見帳	箱1-1	村役人→小泉役所	231.794		
慶応4	1868	9月	稲作下見帳	箱10-75		231.721		
明治2	1869	9月	稲作下見帳	箱1-16	村役人→小泉役所	229.296		
		9月	木綿作下見帳	箱10-21-2	村役人→			88.775

運用について明らかにしたい。

(1) 検見帳の基礎的検討

平野部の村々における耕地利用を明らかにするには、前述の水利・耕地条件にとどめず、生産の具体相を明らかにする必要がある。

その際、各村の収穫高を把握するために作成された検見帳は、村レベルの耕作を還元する上で有効な史料だと考えられる。以下、史料の性格に留意しながら耕地利用の復元を試みたい。

前提として検見帳について概括しておく。

南清彦氏所蔵史料には、享保三(一七二八)年から明治二(一八六九)年まで四〇冊の検見帳がある(表2)。検見帳の形式は宝暦以前・以後で二種類に分かれる。宝暦以前は田地(早田・晩田)・畑綿の区分で行っている。帳面の各筆には小字名を付さない場合が多く、田方での綿作実態は特定できない。一方、宝暦八年以後は、稲作と綿作の区分で帳面が作られるようになる。これは従来の田綿・畑綿という地目別生産高ではなく、作付け品目による区分である。畿内では一七世紀末以降、田方木綿

作が急増する。池上村の史料だけでは推測の域を出ないが、大和小泉藩も年貢賦課の対象として田方綿作高を個別把握したのかもしれない。

次に、検見帳の記載内容について述べておく。帳面には稲・綿を作付ける小字と各筆の「高」、作柄、所持者、綿以外の作物が植えられている場合には大豆・雑毛（蕎麦・茄子）などの生産物名が注記され、帳末にはその年に綿を植えた総石高が算出される。各筆の「高」は、寛政一〇年文月の年記を持つ「條々郷池上村高反畝地并扣帳」³⁸の各筆の分米にほぼ対応する。つまり、検見帳の石高は全耕地における作付け比を示す数値なのである。検見の結果は、村に年貢高を通知する「御物成御下札」に反映される。天明六年の下札によれば、この年の年貢高一八八石余の内三〇石は「当午年稲毛高百四拾壹石三斗五升、木綿高百三拾石貳升七合之所、凶作二付為御投免被下之」との理由で容赦された。この「木綿高」一三〇石二升七合は表2の検見帳の数値と一致する。投免高は、村内各戸の綿作高・稲作高の比率に応じて割賦された。

以上を踏まえて、池上村における稲作・綿作の作付け比率を検討しておこう。表2によると、稲作は宝暦以後一八〇石前後の作付けが維持される。そして安政期以降漸増し、明治初年には二三〇石ほどになる。他方、綿作の推移は、宝暦・明和期に一〇〇石・一二〇石、その後寛政・享和初年まで漸増する。享和二年に一度落ち込むが、再び文化期に増加する。天保期の検見帳は確認できないが、嘉永三（一八五〇）年の作付高一五三石が検見帳現存分の最高値となる。ところがこれ以降急激に減少し、明治二（一八六九）年には一〇〇石以下まで落ち込む。

当該地域における綿作の推移については、開港の影響をいち早く受け、河内・播磨に比べて一挙に消滅した村が多い一方で、比較的綿作を維持する村もあるとの指摘がある³⁹。池上村はどちらかといえば前者に近いが、明治期にも一〇〇石の作付け高が残ることを考慮すれば、減少速度は緩やかであったと考えられる。

（2）池上村における輪作

では、池上村の綿作・稲作はどのように行われたのだろうか。まず、稲・綿両方の検見帳が残存する天明六年を抽出して、綿と稲の作付け地の相互関係をみておこう。稲・綿の検見帳を突き合わせると、地並帳に登録された各筆において、稲作・綿作両方を行う土地は数筆しか確認できない。さらに田方では、稲と綿の作付け地が小字ごとに偏在する。池上村の場合にも、福島雅藏氏が長井村において確認した、小字を単位とする作付け輪作が確認できるのである。次に輪作の形態をみるために、寛政一一（一七九九）年、同一二年、享和元年、同二年の連続四年間と、文化五（一八〇八）年と文化六年の二年間の綿作について、寛政一〇年地并帳との対応状況を表3にまとめた。この表から指摘できるのは次の三点である。

第一に、先に見た天明六年の作付け区分は、条里の「坪」単位の輪作であったことが判明する。例えば十五では、寛政一一年・享和元年・文化六年に、ほぼ全ての耕地で綿を作った。だが、寛政一二年は二筆しか確認できず、享和二年は綿の作付けを確認できない。同様の傾向

表3 綿作耕地の変遷

池上村高反畝地並扣帳	本綿毛見帳の作付耕地					
	筆数	寛政11	寛政12	享和1	享和2	文化5
小字						文化6
二十六	7	7		7		7
二十三	9	4(3)	4(3)	8(1)	4(1)	5(2)
十四	7	2	6	2	5	7
二ノ坪	4	3	1			1
三ノ坪	5		3			(3)
十ノ坪	10	(2)	8(2)	(5)	7(3)	6(4)
十五	10	8(2)	(2)	10		(1)
今井・宮後敷下	9	2	4(1)		3(1)	2(6)
十六	9	9		8		(1)
九ノ坪	10	(1)	8(2)	1(1)	7(1)	4(3)
四ノ坪	4		3		3	3(1)
五ノ坪	9					1
六ノ坪	10	(1)	(2)		(1)	(4)
大口・墨土	4	3		3		2
八ノ坪	7		6		6(1)	2(5)
十七	9	6		7		5
千草池ノ下苗代	8					
かうじ	11	4(1)	2	4(1)	1	(1)
出口道ノ下	4	2		2		2
神ノ木	4	4		4		4
しいれ	5	1(2)		1		1
ヒンカケ・曾根前(畑)	14	7(1)	9	8	6	8
尾学頭(畑)	21	19	12(3)	17	17	14(1)
かうじ(畑)	6	6	6	6	6	2
総計	196	87(11)	72(15)	88(8)	65(8)	57(32)

南和夫氏所蔵史料・箱1-1-9「條々郷池上村高反畝地並扣帳」と、南清彦氏所蔵史料・箱10-36寛政11年「未綿作御毛見帳」、同・箱1-12寛政12年「本綿毛見帳」、同・箱11-146享和元年「本綿毛見帳」、同・箱1-14享和2年「本綿下見帳」、同・箱9-4文化5年「本綿毛見帳」、同・箱1-3文化6年「本綿反畝高毛見帳」を対照して作成。ただし、耕地が4筆以下の小字は省略した。

網掛…同一小字のなかでほぼ全ての耕地所有者が綿作を行った事例
()内は外数で、一筆内の一部で綿作を行う耕地(地並帳に登録された各筆よりも少ない石高の筆数)を表す。

を持つ小字は、二十六・十六・十七などである。またこれと反対のパターンは、九ノ坪や八ノ坪である。また廿三や今井のように、半分が綿作となる年と、全耕地が綿作を行う年に分かれる場所もある。一方、尾学頭などの畑では毎年本綿を栽培する場所もあった。

第二に、輪作を行う小字内には、規則性とイレギュラーに綿作を行う小規模耕地もある(表中の括弧部分)。これらの土地は反別帳の一筆よりも石高が小さく、分米の一致を確認できない。例えば寛政一二年

や享和二年には十ノ坪のほぼ全筆で綿作が行われたが、その間の享和元年は宮村の出作者三名のみが綿を作付けし(他二筆は大豆)、うち二筆の分米は地並帳の分米の二割程度しかない。こうしたイレギュラーな綿作は、本来稲作を行う坪のうち、所有者の個別条件によって部分的な綿の作付けが可能な耕地であったと考えられる。しかしその規模はいずれも小さく、小字ごとの輪作に従って一筆全てを綿・稲どちらかに統一するというパターンが標準的だった。

第三に、これらの耕地とは対照的に、五ノ坪・六ノ坪の一带には稲作のみを続ける場所がある。稲一毛作を基本とする湿田であろう。つまり、池上村本郷という一つの水利単位の内部においても、すべての耕地に稲と綿の輪作が展開するのではなく、稲しか作れない耕地も存在したのである。五ノ坪・六ノ坪においては、庄屋南甚左衛門家の所持耕地がみられないことも付言しておきたい。

以上の特徴を図示してみると(図2)、輪作のパターンと水路の関連性が見出せる。十七・十六・十五と八坪・九坪・十坪の耕地は、水路を挟んで異なる作物を栽培する関係がある。また、稲作のみを行う五坪・六坪も同一の水路から取水する田地である。おそらく配水先に応じて水路を切り換え、小字ごとに用水を一斉配分し、水路に面した水口から順に取水するというシステムが機能していたのではないだろうか。それに関して池上村の史料で確認できるのは、綿田への用水差配が村として行われていることである。一例として庄屋南甚左衛門の寛保二(一七四二)年の日記から六月の記事を抜き出しておこう。

【史料6】

十八日晴、土用二入、綿田へ一番水入申候、出作も同事二候（後略）

十九日晴、綿田一番十八日迄二大方入仕舞、十九日夕上口ノ田へ水入申候

廿七日晴、（中略）昼前二孫兵衛ノ下男

弥兵衛ヲ以被申越候へハ、出作ニハ明日

綿田へ式番水入させ申候間、本郷ニも御入候而可然由被申越候ニ付、宇兵衛ヲ村

中関板候様触させ申候

廿八日晴天、綿田へ早朝式番水入レ申

候、猶又麦つきス（後略）

注目したいのは二七日に信太郷方の出作ニ

〇八石分の庄屋である孫兵衛が、甚左衛門に

翌日出作の綿田へ水入れを行うと連絡し、本郷の水入れを促したことである。甚左衛門は

歩役の宇兵衛を介して本郷の百姓に触を廻し、

翌日に綿田への「式番水入」を行った。綿田

の水入れは、本郷・出作の村役人の差配のもの

と一斉に行われたのである。つまり輪作での

生産には、個別経営の条件に加えて、本郷や

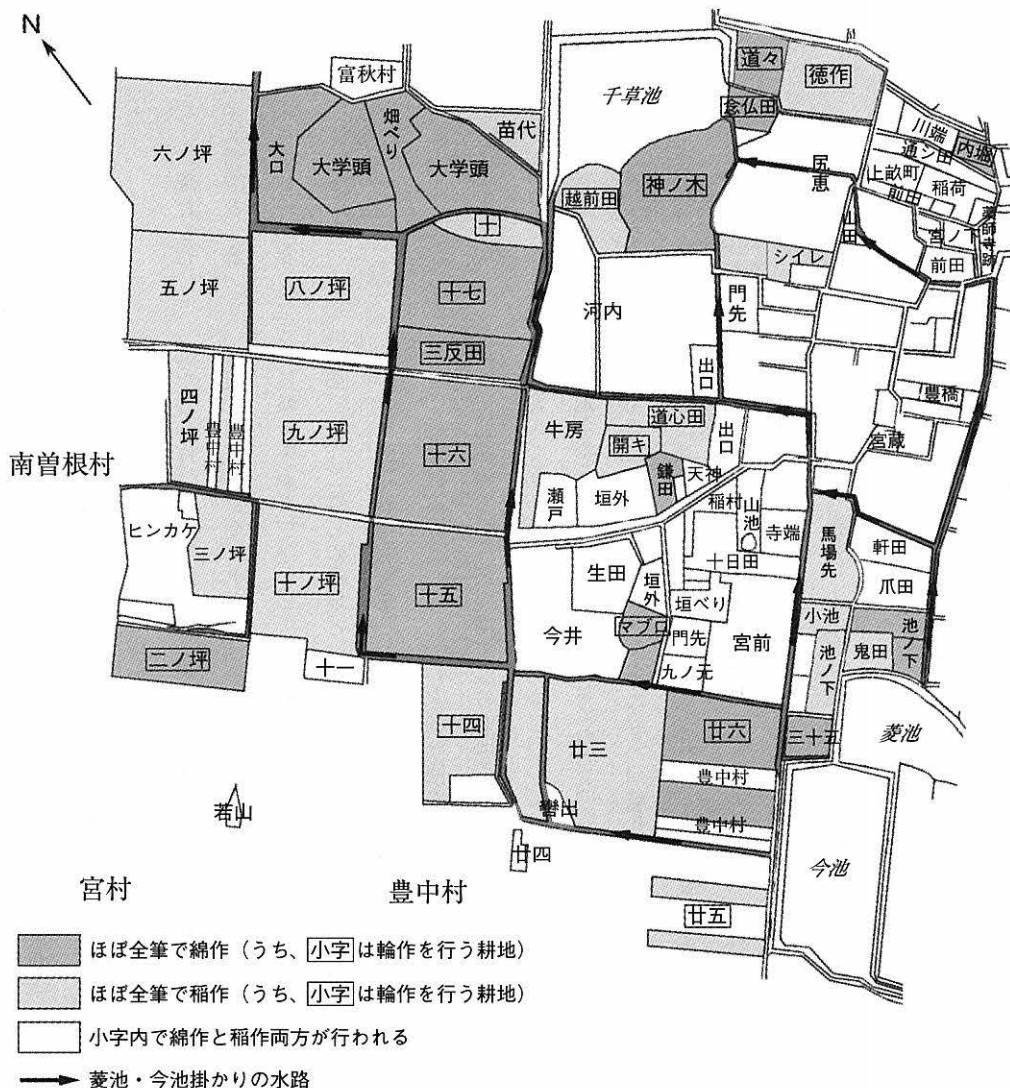


図2

出作という枠組みによる溜池の利用秩序が強く機能したといえよう。

なお、検見帳から各家の作付高をみると、連続する二年の間で稲作・綿作の差が大きい家も存在する。例えば、本郷で所持高二八石余の庄屋友右衛門家は、寛政一一年・享和元年に一五石以上を綿作に当てるのに対し、寛政一一年・享和二年には一〇石強程度である。さらに、本郷の所持高二二石の南角右衛門家の場合、寛政一一年の綿高は一四石弱だが、寛政一二年二石余・享和元年一三石・享和二年一石と推移し、各年の偏差が大きい。所持地の多い百姓でも自己の所持地内のみで稲・綿を配分するという輪作は行えなかったのである。

当該期の木綿作は和泉国内の主要な商品作物であり、木綿生産の収益は、稲作の二倍に及ぶとする研究もある。⁽⁴¹⁾池上村の綿作も、幕末安政期以降に急激な落ち込みを見せるまでは漸増傾向にあり、積極的に田方綿作を展開している。作付け規定に関する史料は確認できないが、このような輪作方法を探ることで、条里の上に成立した水利を効率的かつ最大限に利用し、個々の綿作生産の拡大を進めたのではないだろうか。

(3) 近世後期南甚左衛門家の水利利用

ところが、以上のような坪単位の共同体規制だけでは捉えられない手作り経営の様相も存在する。最後に、耕地の展開状況を踏まえて、一節や二節で検討した諸水利網の権利がどのように機能するのか検討しておきたい。毎年の耕作状況が記された史料は確認できないが、享和の年に庄屋南甚左衛門家がどのように用水を工面したかを記した日

記が三冊残っている。ここでは記載内容が豊富な文政九（一八二六）年

「大日照旱損二付水汲諸留」（以下「水汲諸留」と略⁽⁴²⁾）から、本郷庄屋南甚左衛門家の手作り地における用水差配を検討しておく。なお、甚左衛門家の概要に触れておくと、文化期の当主は一代に限って「友右衛門」を名乗り、文化四（一八〇七）年段階で三六石余を持ち、本郷では所持高第一位であった。⁽⁴³⁾また文化期の小作宛米帳「歳々下作請取帳」によれば、文化四年の小作地は屋敷一筆、田地七筆であり、所持地の大半が手作り地であったと考えられる。⁽⁴⁴⁾文化一〇年頃には弟友三郎が一〇石弱の耕地を譲与されて分家し、文政一二年以降、友三郎家は屋号を友右衛門と名乗った。「水汲諸留」の書かれた文政九年の友右衛門（以下、史料では「友右衛門」と表記されるが、屋号「甚左衛門」を用いる）の所持高は二八石余である。⁽⁴⁵⁾小作地・手作り地の割合が分かる史料は天保期まで確認できない。⁽⁴⁶⁾

「水汲諸留」には、六月二四日頃から水汲みの詳細が記される。ただし冒頭には、六月に村役人が定めた「轡手刈番割之事」、七月初めの部分には「十ノ坪井戸番割」が写されている。まず、文政九年の甚左衛門家の刈・井戸の諸権利について、二つの番割を見ておこう。

轡出刈の番割（表4）は、「初日二日二夜」を南友右衛門（甚左衛門家）分、「次之二日二夜」を村方分に分割し、村方分は全体を八組に分け、六・七名ごとに計五二名が水掻きを行った。轡出の番割は、寛永三（一六二六）年以来「初日二日二夜」は道泉とその子孫（五郎左衛門・孫兵衛）、「次日二日二夜」が村中だったが、文政期には初日が南甚左

衛門家に切り替わっている。時期は不明だが、轡出測床は五郎左衛門・孫兵衛家から甚左衛門家に売却され、甚左衛門は村方より有利な「初日」の権利を確保したのである。

一方、十ノ坪井戸（表5）は、利用権所有者二名で水掛り面積は一町五反強である。番割の末尾には「右之通、昼夜、三反当昼式反夜順々水汲可申者也」との書留文言が付されている。番手の筆頭を南甚左衛門、二番手を南角右衛門が占め、十ノ坪井戸における南家の優位性が見て取れる。他の仲間構成員は甚左衛門家・角右衛門家が田地に水を汲んだ後で井戸を利用したのである。

次にこれらの諸水利をどのように手作り地へ振り向けたのか、「水汲諸留」の記録を見ていこう（表6）。日記からわかる手作り地の作付け品種は、字十六の二反で早稲、十五の一反で「万ぼう」という種の稲、「十七」二反では糯を栽培していた。一方綿作は、畑辺の二反、八ノ坪一反、九ノ坪一反半、林一反に作付けている。品種は不明だが、これ以外に河内一反半、ごんぼ一反半などの手作り地があり、経営規模は合計一町五反程度だったと考えられる。日記の期間を通じて甚左

衛門家の手作りに携わるのは、甚左衛門（友右衛門親族か）・弟安次郎・友右衛門下男万助・下女しへ・分家友三郎とその下男兵蔵・下女いわ、村内他家の庄右衛門・喜兵衛である。

この年は五月一日から快晴が続き、田植を終えた時点で「池水過半仕舞、大ニ案居候」との状況に陥った。その後の雨で池水も八割方回復し、田方に作付けた「田綿」へ三度の「水入」を行った。ところが六月二〇日より日照りとなり、池の余水分配や測の水掻きが開始される。

轡出の利用は、六月二四日の「池仕舞申候二付、六月廿四日夜■廿六日迄二日三夜、測出水尾学頭島へ水遣シ申候」という記載からはじまる。この後、二六日には轡出の掻口普請が行われ、二七日には村役人である友右衛門（甚左衛門家当主）・茂右衛門の二名によって、村方の轡出利用順を定める番割が実施される。普請に使用する土俵一二俵の半分は甚左衛門家が負担しており、入用は用益権に応じて割賦されることがわかる。

掻口普請の翌日には、今池の余水（底水）が入札によって売却される。そして六月二八日以降、轡出測の利用が本格化する。その間、甚左衛

表4 轡出測の番割

* 初日2夜：南友右衛門分

* 次の2日2夜：村方分

村方分の番割

《1番組》	《5番組》
・茂右衛門 ・弥吉 ・吉右衛門 ・梅松 ・与右衛門 ・治右衛門	・勝右衛門 ・長三郎 ・宗右衛門 ・源七 ・勘治 ・助左衛門
《2番組》	《6番組》
・角右衛門 ・甚右衛門 ・弥助 ・平吉 ・佐兵衛 ・安右衛門 ・弥七	・宗左衛門 ・新右衛門 ・九左衛門 ・源右衛門 ・太八 ・安兵衛 ・平右衛門
《3番組》	《7番組》
・彦左衛門 ・久太郎 ・庄蔵 ・義兵衛 ・助三郎 ・象松 ・とよ	・友三郎 ・久兵衛 ・政平 ・十次郎 ・吉兵衛 ・宗兵衛
《4番組》	《8番組》
・口右衛門 ・利兵衛 ・伊兵衛 ・久左衛門 ・庄左衛門 ・弥左衛門	・元右衛門 ・甚七 ・清兵衛 ・官蔵 ・源蔵 ・はつ ・治郎吉

典拠：南清彦氏所蔵史料・箱6-61-5
「大日照早損二付水汲諸留」

表5 十坪井戸番割

	反数	名前
1	■反半	南友右衛門
2	1反半	角右衛門
3	半反	庄左衛門
4	2反	官蔵
5	1反	治郎吉
6	1反	清兵衛
7	2反	久兵衛
8	2反	小きん
9	3反	甚七
10	1反	茂右衛門
11	1反	儀右衛門

典拠：南清彦氏所蔵史料・箱6-61-5
「大日照早損二付水汲諸留」
友右衛門家の反数は虫損により不明

表6 文政9年 南甚左衛門家の澍・井戸利用

月	日	澍水など	澍出澍の水汲み		その他 池・井戸の水汲み		
			灌漑田地・畑	人足	池・井戸名	灌漑田地	人足
6月	24夜~26日	澍水汲み入れ	尾学頭畑				
	26日	澍出掻口関普請		土俵6俵遺す(村方と折半)			
	27日	澍出村方番割		甚左衛門・茂右衛門			
		今池余り水売却					
7月	28日	友右衛門澍水	わせ十六2反・十七上畝町・畑辺1反(友三郎方)	甚左衛門・安次郎・下男万助・下女しへ・分家友三郎・下人兵藏・下女いわ			
	1日						
	2日	友右衛門澍水	十五1反・三反田1反半	友三郎下人兵藏・いわ・安治郎・万助・しへ・甚左衛門・庄右衛門			
	3日	友右衛門澍水	ごんぼ1反・十六2反・十七7畝	下人万助・下女しへ・友三郎下男兵藏・甚左衛門弟安治郎			
	4日	村方番打					
	5日	村方番打					
	6日	友右衛門澍水	八ノ坪(友三郎方)2反・八ノ坪1反・九坪1反■				
	7日	友右衛門澍水	畑辺2反・十七2反				
	8日	【村方番打】					
	9日	【村方番打】					
	10日	友右衛門澍水	甚左衛門方五坪1反・畑辺1反	庄右衛門より3、4人	池水入	林1反	
	11日	友右衛門澍水	ごんぼ1反・十五1反	友右衛門より5人・甚左衛門・庄右衛門より2人			
	12日	《 綿作の早芽取り(安治郎・万助)／草刈り(藤吉) 》					
		村方番打			かうじ井戸より水汲み	かうじ1反	喜兵衛・下人しへ
	13日	《 家内綿芽がい取り(刈り取りカ)／朝の間米つき(万助) 》					
		村方番打					
	14日	盆休日(澍水休)					
	15日	盆休日(澍水休)					
	16日	友右衛門澍水	十五1反・十六2反・九ノ坪1反				
	17日	友右衛門澍水	半・八ノ坪1反				
	18日	【村方澍水】					
	19日	【村方澍水】					
	20日	友右衛門澍水	十七1反(「水行届兼」)				
	21日	友右衛門澍水					
	22日	村方澍水					
		《 藪入1日休み／ただし友右衛門は休みなし 》					
	23日	村方澍水			彦市仲間井戸より水汲み(終日)	稲毛もち(十七下)	安治郎・喜兵衛・おしへ
	24日	友右衛門澍水	十五1反稲毛				
	25日	友右衛門澍水	十六1反[2]畝				
	26日	村方澍水					
	27日	村方澍水					
	28日	友右衛門澍水					
	29日	友右衛門澍水					
8月	1日	【村方澍水】					
	2日	【村方澍水】					
	3日	友右衛門澍水	十七稲毛				
	4日	友右衛門澍水	十七3畝				
	5日	【村方澍水】					
	6日	【村方澍水】			かうじ井戸水掻き	かうじ丁田1反	安治郎・万助喜兵衛
	7日	友右衛門澍水	十五1反	喜兵衛・しへ・藤吉	かうじ井戸水掻き	十七	安治郎・万助
	8日	《 朝の間、九ノ坪綿取り 》					
		友右衛門澍水	…水汲み相止め				

典拠：南清彦氏所蔵史料・箱6-61-5「大日照早損ニ付水汲諸留」

凡例 【村方澍水】…日記には記されていないが、前後の日の「友右衛門澍水」の記載から、「村方澍水」と推測される場合【 】を付して表示している。

《ゴシック体》…農作業の内容など。()内はその作業に当たった人物名。

灌漑田地欄の下線部(「十五1反」など)…この年稲作を行っている田地。

門家・村方間の番水は厳密に二日単位で交代し、盆と藪入りを除く全ての日に水掻きを行なっている。甚左衛門家の事例しか分らないが、六月末以降の渚水の田地別供給回数は、稲作を行なう田地には十七に七回、十六に四回、十五に四回など定期的な汲み入れが行われたのに対し、綿を植えた八ノ坪・九ノ坪への取水は二回にとどまり、水の多くは稲作に向けられた。また甚左衛門家の手作り地だけでなく、友三郎家の畑辺や家内の甚左衛門の五坪にも水が分与されている。友三郎家の渚利用権は、村方七番手の組だが、甚左衛門家の分家であることによつて、実際には「初日」の利用権の中で轡出渚水を引水したのである。

また、甚左衛門家は十坪井戸のほかに、河内井戸や「彦市仲間井戸」の利用権も所持し、轡出が村方番水の日には井戸水を利用してゐる。灌漑田地を限定しない渚水の権利と、各田地単位の井戸利用権を合理的に組み合わせて運用したのであろう。

このように、甚左衛門家の作付けは村の輪作に規定されたが、実際の耕作レベルにおいては、他よりも有利な水利権を確保していた。その水利権を整理すると、①本郷を単位とする溜池利用では、本郷の庄屋という立場で池水差配を統轄し、②轡出渚の運用にあつては、渚底の所有者である同時に、村役人として番水掟の作成主体となること、③各所の井戸利用権を確保し、それらの井戸を①②の運用と合理的に組み合わせて利用したことが看取できよう。また、そうした甚左衛門家の権利は、輩出されたばかりの分家にも及んだ。村政レベルでは別個の「家」として位置づくとしても、生産などの生活局面においては

経営的利害を共有する本家―分家結合が浮上してくるのである。

おわりに

本稿での検討により、池上村における耕地と水利条件の特質として、近世にも条里を単位とする「郷」の枠組みが重要な意味を持ち続けたことが明らかとなった。条里の「里」を単位とする上条郷・信太郷・上泉郷の単位性は、溜池の用水体系として持続した。また、池上村の場合、この枠組みは本郷・出作という相給支配の枠組みと一致していた。郷切で行われた太閤検地の後、上泉郷や信太郷の検地帳に登録された池上出作は、一七世紀半ばを画期に池上村の村高として認知されてゆく。しかし、村請制の枠組みでは本郷と区別され、人別のない土地のみの「村」であり続けた。池上村では、寛文元年に上泉郷側の出作一四石、元禄一四年には信太郷側の二〇八石分が順次伯太藩領へ編入され、本郷・出作の相給支配が定着する。出作・本郷それぞれの村運営を検討する場合にも、この相給の枠組みが水利組合の単位でもあるという点に注意する必要がある。

またこうした水利網に加えて、実際の耕作レベルにおいては、同一水路を用いる「坪」単位の作付け規制が存在した。池上村の主要商品作物である綿は、村内大半の田地において、坪（小字）ごとの輪作によって生産されていた。そのため、たとえ甚左衛門家や角右衛門家などの大高持であっても、個人の経営内で稲・綿を選択することはできなかった。また、田方綿作が本格化しても、耕地の一部には綿作に不向

きな稲作のみの田地もあった。

ただし甚左衛門家や角右衛門家と村内小百姓との関係については、溜池用水レベルの作付け規制からのみでは見えない局面もある。南甚左衛門家の手作り地への用水差配でみたように、実際の水利用益には、様々な諸権利が重層的に成立していた。轆出測や仲間井戸は、溜池用水の枯渇後にこれを補完する水源として機能した。轆出測の用益は村全体に開かれたものでありながら、測床の所持者は一日目の利用権が認められていた。仲間井戸の場合には、より厳密に井戸利用者と灌漑田地を権利化するあり方がみられた。そして一九世紀初頭、本郷の庄屋南甚左衛門家は、こうした諸水利権を最も有利な条件で所持したのである。輪作慣行下においても、綿作の拡大が行われるなかで、それに即応した水利秩序が形成され、権利の集積が展開したのである。

ところで、一七世紀の水利用益はこうした利用秩序と全く異なるものであった。そこにはかいつと大村という、一八世紀には消滅してゆく小集落の枠組みが存在した。一七世紀のあり方を踏まえることで、生産基盤をめぐる人々の諸関係を重層的に把握する必要がある。

ただし本稿では十分に踏み込めなかった問題もある。第一に、南甚左衛門家の用水差配については、手作り地の状況しか分析できなかった。天保期の南家は、手作り地を上回る規模の小作地を所持していた。輪作の実態を踏まえて「水汲諸留」には記されない小作人との関係を明らかにしなければならない。また、各水利組合の内部分析も十分とはいえない。水利組合が村請の単位であることを踏まえれば、出作・

本郷の村運営として別途検討する必要があるだろう。

【註】

- (1) 中村哲「近世先進地域の農業構造―和泉国南郡春木村の場合―」（京都大学人文科学研究所調査報告第二一号、一九六五年）。
- (2) 福島雅藏「近世後期の泉州綿作と溜池灌漑」（同『幕藩制の地域社会と在地構造』一九八七年）。
- (3) 三田智子「上代町の調査と和泉の近世村落」（『市大日本史』一一号、二〇〇八年）。
- (4) 町田哲「近世和泉の地域社会構造」（山川出版社、二〇〇四年）。
- (5) 「南清彦氏所蔵史料・箱2-96」明和四年「明細帳」。以下、南清彦氏所蔵史料は「南清彦氏」、南和夫氏所蔵史料は「南和夫氏」と略す。
- (6) 大阪市立大学日本史研究室合同調査報告書「和泉市池上町における総合調査」（『市大日本史』第九号、二〇〇六年）。
- (7) 今池は、一八世紀初頭の史料には「新池」という名称で記載されている（「南清彦氏・箱12-96」宝永五年「本郷水除樋伏樋門樋戸関覧寸法覚」）。だが築造年代を特定できる史料は確認できていない。
- (8) 「南清彦氏・箱2-96」。
- (9) 「南清彦氏・箱14-57」。
- (10) 「南清彦氏・箱10-25」。
- (11) 寛政九年の留帳（南清彦氏所蔵史料・箱3-11表紙欠）には、同年の千草池の用水差配・普請費用などに関する水掛り五ヶ村の争論に関する史料が写されている。この史料にみえる寛政段階での千草池水掛り村々は、池上出作のほか、一橋領知の尾井村・中村・富秋村・森村、林大学頭知行所尾井千原村の六ヶ村となっている。
- (12) 前掲注3三田論文。
- (13) 「南清彦氏・箱18-188」。
- (14) 「南清彦氏・箱18-305」明治六年「伯太立会用水入方割府帳」など。
- (15) 「南和夫氏・箱1-2-2」。

- (16) 『和泉市史』第二巻。
- (17) 『和泉市史』第二巻。
- (18) 『和泉市史』第二巻。
- (19) 「前田幸子氏所蔵文書・引出2-1-19」。
- (20) 熊谷光子「近世黒島村の山論・水論」（和泉市教育委員会編『旧和泉郡黒島村関係古文書調査報告―現状記録の方法による―』一九九五年）。
- (21) 「南清彦氏・箱12-30」「享保六丑日記」。
- (22) この争論に関わって作成された八ヶ村の訴状として、もう一通、享保一〇年四月一四日「乍恐口上書を以追御訴訟」（『泉大津市史』第二巻収載、水利二四、田中愛昭氏所蔵史料）が確認できる。この史料は享保七年の「国分け」以降、摂河泉播の管轄機関となった大坂町奉行所へ再度訴訟が行われ、その後検使派遣の指示を受けて、追訴訟したものである。この中では八ヶ村と国府河頭井との関係について「右村々溜池とも拾三ヶ所、かうくす水を込来候、勿論渴水之時分ニも横尾川へ水参候節ハ、府中・黒島村へ断申、水取御田地養来申候」と述べられている。
- (23) 例えば、争論終結時に下付された裁許状の宛先村々のうち、こうこうず井分は黒島村・府中村二ヶ村のみである。また裁許文面でも、八ヶ村との関係はまったく言及されない（『河野家旧蔵文書・冊95』享保一二年八月二日「かうくす井出入御裁許書写」）。
- (24) なお井郷関係文書の本帳などは府中村が保管した（和泉市史紀要第1集『旧泉郡黒島村関係古文書調査報告書第二集―現状記録の方法による―』和泉市教育委員会、一九九七年）。
- (25) 「南清彦氏・箱10-74」享保五年「子之覚」。
- (26) 「南清彦氏・箱10-19」宝永七年「本郷万覚帳」。
- (27) 「南清彦氏・箱10-74」享保五年「子之覚」。
- (28) 「南清彦氏・箱10-96」。
- (29) 「南清彦氏・箱11-170」および「同・箱11-175」。
- (30) 文祿検地段階での大村・かいと村の構成や耕地の展開については、紙幅の関係もあるので別稿を準備したいと考えている。
- (31) 「南清彦氏・箱10-19」宝永七年「本郷萬覚帳」。
- (32) 「南清彦氏・箱10-74」享保五年「子之覚」。
- (33) 注25に同じ。
- (34) 「南清彦氏・箱10-102」「享保九辰覚」。
- (35) 「南清彦氏・箱10-24」。なお各井戸仲間については、〇五年度日本史講読Ⅲ受講生「史料から見える近世池上村の二、三の側面」（『市大日本史第九号』大阪市立大学日本史学会、二〇〇六年）も参照されたい。
- (36) 馬賀井戸は字「廿三」に所在した「南清彦氏・箱11-157」。馬賀井戸の成立時期は、五郎左衛門・孫兵衛との争論で問題になった「廿三」の新井戸築造年時と重なることから、争論と関連する可能性が高い。
- (37) 「南清彦氏・箱2-101①」元小泉県管下の分。
- (38) 「南和夫氏・箱1-1-9」。
- (39) 前掲注1中村論文。
- (40) 「南清彦氏・箱10-168」「寛保二覚」。
- (41) 『泉大津市史』第一巻下。
- (42) 「南清彦氏・箱6-61-5」。
- (43) 「南清彦氏・箱7-91-4」「卯年御物成帳」。
- (44) 「南清彦氏・箱11-127」。
- (45) 「南清彦氏・箱7-96」。
- (46) 天保一二年の宛米勘定帳では、大半が小作地となっている。「水汲諸留」の書かれた文政期は、文化期の手作り地を中心とする経営が地主的なあり方へ変化する転換期と考えられるが、詳細は今後の課題としたい。

（大阪市立大学文学研究科後期博士課程）